九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 邦領樺太北部幌登山に於けるエゾマツ、トドマツ一齊林の成立に關する考察

田中, 祐一
九州帝国大学演習林助手

https://doi.org/10.15017/14205

出版情報：九州帝国大学農学部演習林報告. 6, pp.1-106, 1934-06-30. 九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

# 邦領樺太北部幌登山に於けるエゾマツ、トドマツ一齊林の成立に關する考察

田　中　祐　一

Y. Tanaka; Ueber die Entstehung der gleichalterigen Bestände von *Picea jezoensis, Abies sachalinensis* im nordsachalinischen Gebirgeswald (Horoto).

## (I)　緒　　言

樺太演習林は邦領樺太の北部に在つて北樺太に其源を發する幌内川の右岸にある保惠川、千輪川の支流域を占むる面積約 20,335 陌で東經 142° 50′～143°, 北緯 49° 25′～49°30′ に位する。幌登山は演習林の中央部にあつて樺太中央山脈に連り、幌内川ツンドラ平原に臨む邦領樺太に於ても有數の高嶺で本調査は此幌登山のエゾマツ、トドマツ林に就て行つたものである。

樺太北部に於けるエゾマツ、トドマツ原生林の構成と其遷移に就ては既に演習林報告[1]に發表せられて居るが、之れは平地林に於ての調査であつて山岳林に於ては多少其趣を異にするものである。本文中、山岳林と指稱するのは曩に演習林報告に於て記述した地形區分（準ツンドラ帶、第一平坦部、第二平坦部、中腹部、山頂部）に對照するときは、第二平坦部の上部（海拔約 200 米以上）から山頂部に到る地域であつて、主として此地域のエゾマツ、トドマツ林を調査したが山岳林との比較對照上第二平坦部の一部をも調査した。地表植物の調査は既に演習林報告[2]で詳細に述べた處であるから本調査では單に概察的の記載に留めた。

本文は昭和七年、八年の夏期に於ける調査並に昭和七年に於ける學生諸君の調査

---

[1] [2] 九州帝國大學演習林報告　第一號；樺太演習林に於ける植生調査
同　　上　　第二號；邦領樺太北部に於けるエゾマツ、トドマツの天然更新並に根系に關する研究

の一部を基礎とし、大正十四年以來數次の調査に際しての觀察を交へて作成したものであるが猶將來の實驗並に研究によつて明かにすべき點も少くないのである。

起草に際して演習林長土井教授に多大の御援助を賜り、樺太演習林主任森川助教授並に同所員各位の御助力に預つたことが多い。

農學部長植村教授には拙文を御閲覽下され種々の御教示を賜つた。茲に前記諸先生並に各位に厚く謝意を捧ぐる次第である。

## (II) 地形、地質、土壤及植生の概要

幌登山は邦領樺太北部に於て敷香岳、保惠山に亜ぐ高嶺で保惠山とは指呼の間に屹立して海拔高 1056 米[1] である。東面は幌内川の平原に臨み平地林の原生大樹海を脚下に俯瞰し、西面は奥地水源地域に連なり、南面は保惠山に對立して共に保惠川の關門を擁し、北は木苑山を經て奥地中央山脈に連り附近山岳林一帶と平地林とを比較視察し得る勝地である。

### 地　形

幌登山西面の奥地水源地域に連る側面は極めて緩斜であるが東面の幌内川平原に對する側面は甚だしく急斜であつて、主要な嶺線を山頂より僅かに下れば第三紀層整層斷崖となり、これより急激に傾斜し、山脚は段丘となつて更に平地林に續いてゐる。此山頂附近の整層は傾斜約 10 度、走向南北となつて居るが保惠及幌登山の間に保惠川を狹む斷崖溪谷では多く水平の整層をなして居て著しい皺曲構造は此山岳地帶では未だ見當らぬ。是等の整層狀況より見て幌登山一帶は一大背斜の脚にあつて背斜軸の陷落による地形の如くである[2]。

又主要なる山脈及これより派生する大きな山嶺の嶺線は緩斜であるが兩側山腹は 30～40 度の急傾斜をなして居る。從つて土砂の崩壞、辷落箇所多く崩雪の痕跡を見る地域が屢々ある。故に稍大なる溪流では主要谷線は山頂水落附近まで緩斜であるがそれより山頂までは急勾配となり、主要谷線から分岐する左右の小溪は急激な傾

---

1) 保惠九大演習林事務所の標高を 129 米として實測せる値である。

2) 德田博士；樺太島の地形及地質に關する數問題、(地學雜誌、昭和四年)に於て一大向斜原なるやの疑ありとせられて居る。